



TITLE:

人文 第18号

AUTHOR(S):

CITATION:

人文 第18号. 人文 1978, 18: 1-37

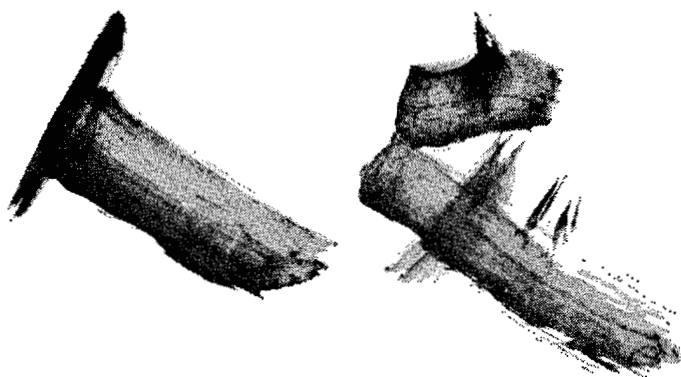
ISSUE DATE:

1978-03-31

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/57144>

RIGHT:

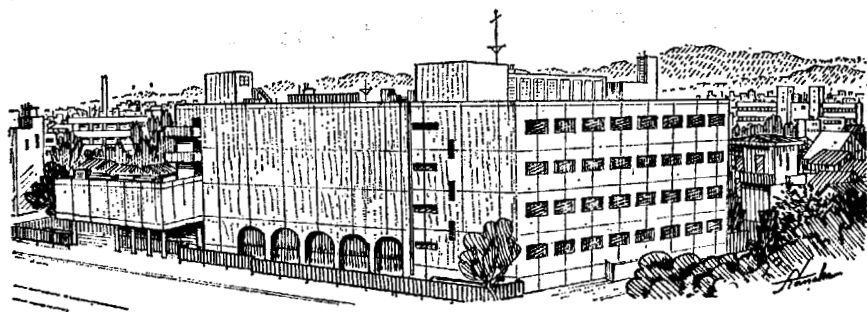


第一八号



1978

京都大学人文科学研究所



人 文 第一八号

1977年6月—11月

も く じ

随 想

- 「政府」の性格……………飛鳥井雅道
 中世史料に読みあきて……………田中 峰雄
 チベット語文献について……………御牧 克己

講 演

夏期講座

- 宮崎安貞『農業全書』……………飯沼 二郎
 大久保利通「征韓論に関する意見書」……………佐々木 克
 顔之推と顔師古……………古川 忠夫
 郭熙『林泉高致』……………曾布川 寛
 オーギュスト・コント『精神的権力について』……………阪上 孝

本のうわさ

- 会田雄次・梅棹忠夫編『ヨーロッパの社会と文化』（小川）・
 林巳奈夫編『漢代の文物』（上山）・飛鳥井雅道『鴨外その
 青春』（荒井）・上山春平『埋もれた巨像』（砺波・柳田聖山
 『初期の神史Ⅱ—歴代法宝記—』（御牧・梅原都）『宋王朝と
 新文化』（熊倉）・熊倉功夫『茶の湯』（谷）

共同研究の話題

- 日本人のいかげんさ……………飯沼 二郎
 文献を反みて縮くんば……………池田 秀三
 奇妙な文化のたわむれへの眼差し……………谷 泰

旅

- クサンテンの遺蹟公園（林）・月と夜光貝（松井）・△中国の
 旅から△大連の夜（深沢）・はずかしかったこと（飯沼）・江
 南瑣記（吉田）・桂林（江村）

書いたもの一覧（一九七七年六月—十一月）

- 東洋学文献センター講習会（20）お客さま（30）人のうごき
 （30）外国人研修員（31）招へい外国人学者（31）おくりも
 の（31）編集後記（37）

カット田中重雄

随 想



「政府」の性格

飛鳥井雅道

西郷隆盛が「征韓論」に破れて参議を辞任し、鹿児島に帰ったときの混乱は、明治中期以後からは想像することもできないものだったらしい。大久保たちは動揺を防ごうと、ただちに天皇に近衛士官たちを召集させて説得につとめようとしたがあまりにも欠席者が多く、効果はあがらなかった。再度の召集も結果は同様だった。

この混乱はふつう、近衛士官たちが西郷によって育成された軍指導部であり、郷党の指導者の突然の辞任を、天皇の権威より上位におこうとした派閥的士族意識で説明する。一応、そうにはちがいないけれども、別の側面から見る事ができるのではなからうか。

天皇が幕末、「玉」（ぎよく）としてしかあつかわれていなかった事情は、維新後、いかに「御親兵」「近衛兵」が天皇のもとに直属するたてまえになっても、ほとんど変わっていなかったことが期せずして立証されてしまったのである。民衆にとって、政府は天皇の政府ではなかった。明治初期、神道が強引に

復活されようとしたとき、まだしも「復古」といった抽象的なイデオロギーによる国民統合が行われかけたのは事実だが、この立役者たる玉松操が政策立案の場から去らねばならなくなってしまう経過は、「御一新」政府が、幻影をすて、散文的な歩みをはじめたこと、いや、むしろはじめざるをえなかったことを物語る。

政府の散文的な歩みは、まだほとんど具体的な政策をもっていなかった。とすれば、ここに露呈してきたのは、大久保の政府か、西郷の政府か、という、固有名詞を冠した具体的なイメージだった。近衛兵が郷党意識によってのみ西郷に加担したというのはおそらく正しくない。西郷の対立者たる大久保も薩摩指導者の一人だったのだから。

政府のありかたを個々の人間でとらえる考えは、西郷の明治十年の挙兵宣言でも典型的にあらわれた。「今般政府に尋問の筋有之」と書きだされる「政府」とは大久保政府のイメージであり、大久保の日記・手紙も、反政府を西郷に形象化してとらえている。明治十年まで、政府とは実はそうしたものだ。これが天皇の直接の権威の注入に転換してゆくのは、維新三傑なきあとになる。

わたしは、この時期までの「政府」とは、多くの方針や政策にもかかわらず、かなり幼いものだったと思う。それをはっきり見ておかないと、明六社も、また殖産興業も、その全体性においてとらえられないのではないかと最近つくづく思っている。

中世史料に読みあきて……

田 中 峰 雄

現在の大学の祖型としての中世大学が形成されたのは、十二世紀末。ところでごく初期の十三世紀あたりの史料をみてみると、思わず、にやり、ときぜられることがしばしばある。

医者になるのが金もうけの第一であり、医者はすべからず患者の苦しんでいる間に医療費の交渉をすべし、と医術者心得を皮肉ったのは、これはすでに、医学校のできたばかりの十二世紀からの話。外部の者が医者をなじることばは、何故か当初から「金もうけ」だったらしい。法学生がスイスイと就職していくのを見て、自嘲と高踏にふける文学生生の風刺詩も、学生詩集の重要なテーマのひとつである。

「私は日夜勉学に励んでおります。……ところが最近はお金が高くて、勉学には多くの費用がいり、……先日ご送金いただいたお金は借金の返済に消え、……このままでは勉学を一時放棄して食うためのアルバイトを余儀なくされ、……それでは父上の御意志を果すこともできず……」。無心の手紙の書き方は、大学の修辭学の教材であつたらしい。しかし権力者もこれを逆手にとる。ローマ教皇のバリ学生あて書翰「汝らの両親や縁者は自己の財産を削つても汝らのため仕送りしている。それというのも、汝らが誠実に生活し、学知の完成をめざしていること

を疑わず、汝らの勉学が、汝らに榮譽を自分らに喜びをもたらすと信じているからである。しかるに汝らは、このつまらぬ係争に没入し……」。当時バリ大学はスト中であった。

学生の方も元気がいい。バリ司教による告発「彼らは学徒と称しながらその実は、武装して強姦、強盗その他悪業のかぎりをつくす集団であり……」。十三世紀バリ大学の主な事件はすべて酒場の乱闘が発端であつたといつても、あまりはずれない。しかし次のような面もある。聖トマス『神学大全』の著作形式はシンマ形式といわれる。まず反対意見を列挙し（異論）、それに対立する典拠を示し（反対異論）、所論を展開して（主文）のち、異論を逐一論駁する（異論解答）。この形式はトマスに限らず当時是一般的だが、大学での公開討論の形式をふんだものである。ところで、これはまさに「討論」であつた。参加者は、主催者（解答者）をたおすため、聖書、教父に典拠を求めて、意地悪く多くの異論を投げつける。解答者は、論理と記憶力の限りをつくして、それらを逐一さばいていかなければならない。一点の曖昧さをも許さぬこの論戦は、多分に騎士のトーナメントを連想させるが、詭弁でもこじつけでも、ともかく黒白をつける戦闘性があつて痛快であり、それだけに、解答者の方の力量が、あからさまに露呈するものである。

ある人は、この形式こそ中世人の思考を規定した最大のもので評価するが、現在も行なわれればいかがなものやら。ともあれ、中世の大学史料に読みあきてふと研究所の中庭を眺めやると、いろいろと思ひはめぐるものである。

チベット語文献について

御 牧 克 己

チベット語文献という場合、普通大きく分けてインド語（主にサンスクリット）の翻訳であるものとチベット人自身によって著述されたものとに分けられる。前者は「チベット大蔵経」という名で呼ばれ、後者は大蔵経の外にあるものという意味で「蔵外チベット文献」と呼ばれるのが通例である。理解を容易にするために大正大蔵経との比較で云えば、前者は「インド撰述部」（大正一一三巻）に、後者は「中国撰述部」（大正三三三巻）と呼ばれるものに相当すると思えばよい。

チベット大蔵経は北京影印版で百五一巻を数え、漢訳蔵経三二巻と比べればその膨大さが解るであらう。また、漢訳大蔵経のようにはその分類・整理に所謂「三蔵」（經・律・論）という概念を直接採用せず、カンギュル（仏説の翻訳）の意・テンギュル（論書の翻訳）の意、という概念区分を用い、前者には經典そのもの、後者には注釈・論書を主に配属せしめている。現在我々が手にしうるチベット大蔵経の版本は、北京・デルゲ・ナルタン・チョネ等主なものは一八世紀頃のものである。各版本の名前はそれが印刻された地名に基づいている。これらの諸本は入手するのがそれ程困難ではない。影印本やマイクロフィッシュの形で出版されているものもあり、そうでな

くともコピーを依頼すれば容易に入手出来るからである。

一方、蔵外チベット文献についてはかなり事情が異なる。我が国の蔵外文献はおよそ四ヶ所に存在し、河口慧海・青木文教・寺本婉雅・多田等観諸氏将来によるものが夫々東洋文庫・東京大学・大谷大学・東北大学に収められている。問題は資料の未公開性で、公的にコピー可能なものはこのうちでも僅かにすぎない。この資料未公開性が従来我が国のチベット学発展を妨げる大きな痛であったが、近年インドで続けられているチベット文献複製事業が注目に値する。デリーに設置されたアメリカ国会図書館の American Libraries Book Procurement Center がこの事業を支援し、出版文献を買上げ、アメリカの一九の大学に配布することによって資金面で援助している。ニンマ派やボン教の未知の資料を多く含み、これまでのどのコレクションをも質的量的に上回っている。上述の如く一九のアメリカの大学は自動的にこの文献を一セット設置することになる。一方、我が国には、全体を通じて一セットすらないのが現状である。諸大学・諸機関が協力して手分けして購入し少くとも全体として一セット設置するよう切望される次第である。



講演

夏期講座（昭和五十二年度）



八月一日～三日
於分館講堂

宮崎安貞『農業全書』

飯沼二郎

この四、五年、友人とともに、江戸時代の農書について、研究書を出し、その複刻に努めているのは、江戸時代の農書の中にこそ、日本農業の伝統（時代とともに）は変らない日本農業の基本的な形態）が記述されていると考えるからである。そのような伝統が農業に存在するのは、農業が最も強く影響を受ける風土が、

国により地方により一定しているからであろう。

どこの国の農業でも、伝統に基づいて近代化（つまり労働生産性の増進）がすすめられたばあいには、必ずその国の農業は発展しているようだ。昨年の夏、わずかに二週間ではあったが、中国の農業を視察して、その発展ぶりに目をみはったが、それは、それぞれの村の伝統に基づいて、近代化がすすめられている結果であることを知った。これにたいして、日本で最近、農業が急速に衰えたのは、伝統を否定して近代化がすすめられたからである。伝統を否定すれば、近代化をすすめればすすめるほど、その国の農業は衰えていく。

では、どうしたら、日本農業の伝統を知ることができようか。まず第一に、その村で多年、真剣に農業をやってきたお年寄りに聞くことが一番いいが、次いで、そのような多年の体験を書きとめたもの（つまり農書）があれば、それを読むのがいい。私が最近、江戸時代の農書にとりつかれているのは、日本農業の近代化の前提として、まず伝統を知りたいためである。

いまでも、江戸時代の農書が読まれなかったわけではない。しかし、それは大部分、歴史的な興味から、つまり、その農書の書かれた当時の、その地方の農業を知るためであって、その地方の農業の伝統を知り、近代化について考えるためではなかった。むしろ

伝統を否定しなければ、近代化はありえないと考える人が、大部分ではなかったか。

江戸時代の農書の中で最も代表的なものは、前期における宮崎安貞の『農業全書』、後期における大蔵永常の『広益国産考』だと思う。今回は『農業全書』をとり上げて、日本農業、とくに福岡地方の農業の伝統をさぐるうとした。たとえば「農事総論」の冒頭の「節、「抑耕作にハ多くの心得あり。先農人たるものハ、我身上の分限をよくはかりて田畠を作るべし。各其分際より内弁なるを以てよしとし。其分に過るを以て甚あし」とす」は、日本農業の伝統を最も簡潔、明瞭にいいあらわしたものだといえよう。

大久保利通「征韓論に関する意見書」

佐々木 克

明治六年五月、米欧視察から帰国した大久保利通は、当初政務に関与しようと思わず、ようやく征韓問題が政府部内で沸騰点に達した十月十二日に至り参議に就任し、十四日の閣議に出席して征韓反対を主張した。「征

韓論に関する意見書」は、参議に就任した時に三条実美（太政大臣・岩倉具視（右大臣）に呈出したものであると想定される。

意見書では、民情・内政の不安定、財政事情の悪さ、政府の富強のための諸事業が半途であること、輸入超過、ロシアの南下策およびアジアにおけるイギリスの植民地化政策の危機、欧米との条約改正が先決であることなど、七カ条をあげて「征韓」に反対していた。かつ、このなかで大久保は、廃藩以降明治六年段階における日本国家の状況を、きわめて的確に分析表現したうえで、内治の優先すべきことを主張し、しかもそれを国際関係の視座からとらえ補強説明していた。これは一年半の対外経験に裏づけられたものであったから、強い説得力を持ち、征韓派の未熟な国際感覚ではとうてい反論対抗できないところであった。

また大久保は「征韓」じたい、すなわち朝鮮侵略を原則的に否定するものではなく、「朝鮮の役を急にす可らざるを論」ずるものであるとも主張していた。西郷は短兵急な派兵を主張してはいず、派兵は外交交渉如何にかかわるものであり、また客観的にみて朝鮮側が外交使節をむげに殺害するようなことはありえないであろうことは、大久保自身十分承知のことであったはずである。にもかかわらず、大久保は征韓派の主張

を、朝鮮との即時開戦論であるとすりかえ規定をおこなって征韓派に反撃を加えたのであった。この意見書は正論ではあるが短絡も同時に存在し、必らずしも論理的に一貫性があるとはいえない。

この時大久保は、明らかに権力的・政治的目的を露わにしそれをつらぬこうとしていた。それは、一年半のブランクのあいだに実権を握るに至った留守政府主脳を追放し、政治のリーダーシップを奪回しようとするものである。いわゆる征韓論政変は、征韓か否か、外事か内治優先かという対立は表面的なものであり、少くとも大久保にとっては権力の座をめぐる争点が、主たる問題であった。そして政変は、まぎれもなく大久保政権を誕生させる陣痛であった。

征韓論をめぐる政変は、岩倉米欧使節や留守政府の問題とともに新しい照明が当てられつつあり、大久保政権を含めて、相互重層的関連のもとに研究の深化発展がみられれば、明治初年政治史研究に新しい一ページが加えられることになるであろう。



顔之推と顔師古

吉川 忠 夫

顔之推（五三—五九〇？）は梁の武帝治下の江南に生れ、梁の元帝政権の崩壊（五五四）以後、西魏、北斉、北周、さらに隋と、あたかも転蓬のごとく、華北の諸王朝に仕えた。かれは六世紀後半の中国を代表する第一級の知識人といってよい。その「顔氏家訓」二十篇は、「古今の家訓の祖」としてたかく評価され、処世訓はもとよりのこと、家政論、学問論、宗教論、あるいは南北文化比較論等々、内容はいたって豊富である。

一方、顔師古（五八一—六四五）は之推の嫡孫。唐の太宗の貞観時代、唐王朝によつて企画されたさまざまな文化事業に参画しているが、顔師古の名を不朽にするのは、今日においてもだれしもが利用する「漢書」の注釈である。六朝末から隋、唐初にかけて、「漢書」研究は流行の学問のひとつであった。そのことは、当時、「漢書学」ないし「漢書学者」なることが存在

した事実によつて端的に証せられるが、顔師古注は、かかる漢書学の帰結点を示している。顔師古注の基本的性格はいかん。(一)ことがらの注釈ではなくしてことばの注釈——訓詁——であること。(二)後漢、魏、晋の旧注にかえること。旧注がもつばら訓詁を説くのにたいし、師古にちかい時代の近注のなかには、往々にして異聞をあつめることがらの注釈があつたらしく、師古はそれらをしりぞける。

以上の二点を基本的性格とするのだが、ややたचितつて検討してみると、顔師古注には、名を記すことなく、しかもあきらかに祖父之推の説を襲つたとおもわれる箇所が発見される。すなわち、「顔氏家訓」の「漢書」についての言及は、ほとんどすべてが顔師古注に吸収されており、また直接の言及ではなくとも、関連があれば適宜に利用されるといったありさまである。師古の十歳前後のころまで祖父は健在であり、したしく学問の手ほどきをうけたであろう。「顔氏家訓」と顔師古注とのあいだにみとめられる連絡は、漢書学が顔氏の家学のひとつであつたことをものがたつてゐる。それだけではない。師古の叔父にあたる顔遊秦には、「顔師古注にさきだつて、漢書の專注、「漢書決疑」が存在した。顔遊秦説は、幸いにして司馬貞の「史記索隱」にいくらかのこされており、それらを顔師古注と

くらべてみると、両者の一致はいちぢるしい。おそらく、「漢書決疑」の大部分は顔師古注に吸収されたのであり、それゆゑに亡びることにもなつたのであらう。

郭熙『林泉高致』

曾布川 寛

北宋の山水画といえば、中国絵画のなかでも最も輝やかしい金字塔を打立てたことで知られるが、北宋後期、神宗画院を舞台に活躍した郭熙は、時に独絶とまで詠われた李成派の山水画家である。彼の山水は、唯一の真蹟『早春図』(台北・故宮博物院蔵)によつていまなお窺うことが出来、また標題に掲げた林泉高致は、彼の山水画理論を息子の郭思がまとめたものである。

『林泉高致』にあたる前に、先ず神宗朝の宮廷画家としての郭熙について知っておく必要がある。神宗とはいふまでもなく王安石を登用し、新法の急激な政治改革を施行した皇帝である。郭熙はこの神宗の画院に奉職したが、神宗はとりわけ郭熙の山水を好み、一殿の障壁悉くを彼の作品で飾る寵遇ぶりを示した。また元

豊の官制改革の際、新たに建てた廟堂に選ばれたのは『周礼』の書と郭熙の山水画であった。かような神宗の破格の寵遇と廟堂という制作の場は、自ずから山水画の性格を規定した筈である。廟堂に『周礼』が書かれたのは、この經典が秩序立った組織制度を宗とし、神宗体制の指導原理として採用されたからであったが、郭熙の山水画にも同様の機能、少くとも新法の廟堂にふさわしい一定の形式が要求されたと考えられる。

ところで、『林泉高致』は画法の書である。唐末以来の諸派の画法がここに集大成され、郭熙個人の長年にわたる画法の研鑽がここに集約されている。しかし羅列した画法だけを読んでも、実際の運用にあたつてどれが重要なのか明瞭でない。そこで、『林泉高致』の所説の悉くが体现されているといつても過言でない『早春図』を見ると、何よりも形式的な秩序による整然とした構成が印象的である。『林泉高致』にも、山水の主峰は天子を象徴し、まわりの衆山に対し君臣上下の關係にあるべしとあり、また樹木表現について、長松とまわりの衆木は君子と小人の關係にあるべしとある。更に画面の均等三分割に触れ、上を天、下を地の位に定め、中間に景を配すべしという。つまり整然とした秩序形式がここに説かれ、それが第一義的な重要性を有していたのである。『林泉高致』は冒頭でも士

大夫のための山水画を明言し、神觀と清風の表現こそ理想であるとはめかしているが、神觀と清風は、主峰と長松を中心とする整然とした秩序形式の効果に外ならず、それはまた上に天子を戴いた当時の士大夫社会に必要な秩序でもあった。郭熙はこの二語の表現によつて、神宗体制の宮廷画家としてその要請に答えたのである。

オーギュスト・コント 『精神的權力について』

阪上 孝

コントの名を聞けば反射的に実証主義を思い浮べるほど、両者は強く結びついている。しかしコントの主張は、今日、実証主義によつて考えられるものとはひじょうに異なっている。コントの実証主義は社会有機体説と不可分に結合した、全体認識への志向を強くもち、高度に歴史哲学的、世異観的だからである。じつさいコントは、もっぱら統計的実証に依拠して社会の実証科学をうちたてようとしたケトレの著書に強い不

満をもらし、全体認識を忘れた事実の実証を実証主義に背反するものとしてしりぞいたのであった。

コントの理論的立場は、簡単にいえば方法論的全体主義である。それは、共時的次元にかんしては、諸要素にたいする全体の優越、全体による諸要素の決定を主張する。宗教、政治、産業などの諸領域は、相互に関連・依存しあつて社会的全体を構成しており、この全体の認識によつてはじめて明らかにするとされる。通時的次元においては、それは、ある時代は歴史進歩の全体を考察し、そのなかにおくときにはじめて理解可能になる、と主張する。こうして周知のように、コントは歴史進歩の全体を三段階の法則として提示したのであった。さらにコントは、共時の研究が通時の研究に優越する、と述べている。

『精神的権力について』(二八二五)は、こうした枠組にもとづいて宗教の問題を考える。したがつてそこでは宗教的真理ではなくて、社会のなかでの宗教の位置・役割が問題にされる。コントが歴史時代を有機的と危機的とに区別したことはよく知られているが、有機的時代の特質は社会の諸部分が一つの統一的原理によつて全体的秩序のもとに統合されていることにある。宗教Ⅱ精神的権力は人間の内面生活を規制し、共同で生き活動するように人間を結びつけることによつ

て、この組織的統合機能をになうのである。

こうした視点から見るとき、精神的権力の存在の必要性を否定し、あるいはそれを世俗の権力に従属せようとすると最近の革命派の意見はどまちがつたものはない。彼らには有機的社会のあり方についてまったく無知なのである。それによつて、中世における精神的権力の世俗的権力からの自立は画期的な意味をもつ。精神的統合の役割を担う自立的機関が出現したからである。来たるべき産業的社会においては、それが調和的であるためには、自立した精神的権力の必要はいつそう大くなる。社会が巨大で複雑になれば、それだけいっそう社会的統合はむづかしくなるからである。こうしてそこでは、産業家の世俗的権力とならんで、あるいはそれに優越して実証的科学者による精神的権力が存在しなければならぬ。

コントは、ずっとのちに人類教を唱えて、産業的社会に適合する精神的権力をみずから樹立しようとしたのであった。



本のうわさ

会田雄次

梅棹忠夫 編

『ヨーロッパの社会と文化』

(A5判、四一九頁、京大人文科学研究所)



われわれ日本人にとってヨーロッパは長い間、遠くにおいて想うものであり、ふり返って我が身を思う時、常にひきあいに出される比較理念であつた。それは、これほど「日本文化論」をうんぬんするのが好きな我が国において近代主義者であれ、反近代精神の持ち主であれ、あるいは雑種文化論者であれ、純粹文化論者であれ、その多くは常にヨーロッパ文化を念頭において日本文化を論じているのをみればわかる。ロンドンの下宿でノイローゼに陥り、やがて帰国した漱石は我が日本は上つすべりするよりほかないという絶望意識から再出発しようとした。ヨーロッパはわれわれにとつてまさに絶望的理想だったのである。この

絶望感は、一九六〇年代になっていささかバラ色がかった日本社会礼讃論へと変り、しかし、礼讃論者に対する批判もまたすぐに生じた。

昭和四二年、四四年、四七年度の三回、五年の年月にわたつて実施された文部省科学研究費補助金(海外学術調査)による京都大学ヨーロッパ学術調査の報告書であるこの本、『ヨーロッパの社会と文化』が生まれる背景には上記のような日本国内におけるヨーロッパ観、ひいては日本観の変遷をふまえた上で、ならばここで一度、ともかくヨーロッパの、というより具体的にヨーロッパ人の実生活にブチあたつてみようではないか、という基本的な意識がある。

それは巻頭、「ヨーロッパ地域学の立場」という文中で梅棹先生が、カガミとしてのヨーロッパ、規範として学びとるべき対象としてのヨーロッパという捉え方から脱却して「規範そのものの相対化」を考え、日本やアフリカなどと同等の意味で価値のあるヨーロッパを比較学的に把えたと述べておられることから明瞭である。また、巻末において会田先生が、近代——つまり、唯一つの普遍文化と信じられ、手本とされたヨーロッパ近代社会——を成立させている社会的基盤そのものから見直してゆかねばならぬ、と述べておられることにもはつきりと読みとれる。そして、日本におけるこのようなヨーロッパ観はまことに新らしいものなのである。本書では自動ドアー、カラーテレビ、プラスチック器具の少ないヨーロッパがうんぬんされているのではない。日本はもはやヨーロッパを追い越したと喜ぶのではない。電気器具や合成化学製品が日本ほどには普及していない事実を「一つの象徴として考え、そんな事態を来たらしているもつと根本的なものを指摘する目」をもつて、ヨーロッパ人がこれであたりまえと思ひこみ、あたりまえだからこそ彼ら

自身は気づかない日常生活の諸特性が仔細に報告されている。

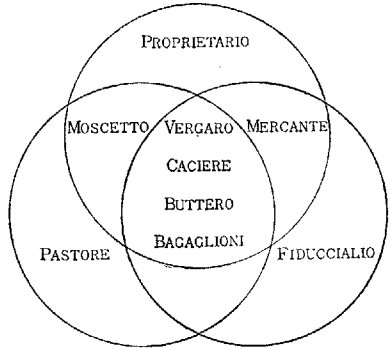
先頃、渋沢敬三以来の遠大な夢の実現として開館した国立民族学博物館のヨーロッパ展示の基本構想もまた、それを担当された和田祐一先生の弁によると、「日本人の知らないヨーロッパ、さらにはヨーロッパ人の知らないヨーロッパ」を見ていただくというものである。ここに二つの「知らない」が並んでいるが、両者の意味合いはおのずから異なるのであって、前者が「識らない」に近いのに反し、後者は日頃、その中にひたり込み、これこそが「文明」と思い込みがちなヨーロッパ人の「気づかない」、相対的価値としてのヨーロッパという意味である、と私は解釈している。

さて、日本人から普遍文化の規範として崇められたヨーロッパ人自身は相変わらず文化使節をもって甘んじているのだろうか。そこら辺はいささかの変化をみせているのではないかという気がする。ちなみに、ここに一冊の本がある。フランスで出版されている *Coffection Terre Humaine* におさめられた Pierre Jakez Heles の手になる *Le Cheval d'Orgueil* (尊厳という

名の馬) である。一九七五年に出版されたこの本はフランスでまさにパンの如く売れ、市井の人々が熱中して読んだ。これはブルトン人である著者自身の祖父であり、本当の馬を所有するには余りに貧しかったが馬小屋にはいつも「尊厳という名の馬」をおいていたというビグーダン(ブルターニュ地方)の一農夫のライフ・ヒストリーを中心にしたビグーダン民族誌である。この本がかように読まれたという事実は、丁度その頃、ブルターニュ分離運動が過激化し、フランス国営テレビ放送局の送信塔が中央集権的な悪権力の象徴として破壊されたりする事件が相ついで時期と符合しているとはいえ、大きな意味合いをもっているように思える。人々は単なる郷愁にかられてこの本を読んだのではあるまい。中華思想の強いさしものフランス人が、このビグーダンの一農夫の頑強な誇りにふれて今さらのように発見したものは大げさに言えば、まさに文化の相対性ということではなからうか。つまりヨーロッパ人自身の中に自らの文化を一つの対象としてみなおそうという意識はあるのである。それは、「ヨーロッパの……」の中に出てくるトレギエのル・

バイユ氏が、トレギエ住民はみずからの街に満足して生きていると言いながら、彼らが幸福なのはほとんど外に出たことがないからで、想像力に欠けているかではないかと述べている事実にも逆説的にあらわれている。他を知らなければ、まさに幸福であることを余儀なくされるのである。

と、この優れた一書を評するにはあまりに非力な私の雑感を述べてきたが、さらに私個人の好みというか、志向にもとづいて蛇足的につけ加えることをお許し願えるなら、本書中、Ⅱの文化篇が最もおもしろかった。民族学志向者としては錯綜した網の目をひとつひとつ解きはぐしていくのに似た快感を味わえたからである。「イタリア中部山村移牧羊……」では、まず、羊移牧経営の諸要素が示めされる。資本財、経営技術、家畜管理技術の各所有者である。この三つの要素は独立に存在するのではなく、かなり重複しあっており、図に示すと左のようにになると考えられるのだが、これらの関係が明快に示めされている。私も初学者が手本とすべき論文であった。上記論文は民族学的手法にもとづいてなされているが、これと対比的に社会学の方法による論



文として、「カタロニア、町と村……」は教しえられる点の多いものだった。カタロニアのいくつかの町での人口動態からスペイン全土の経済・社会状況が読みとれる。

ひとつひとつの論文に関して述べるのは不可能なので、「トルコの村の食事体系」について私が思ったことを記して、私に課せられた重責をふさがせていただきたい。この論文は日常の食生活という、ともすれば看過されがちな分野について精細な記述的論考を加えたものである。題は「食事体系」となっているが、当然料理にも言及したものである以下、記すと、「料理」

という行為の基本的な概念に關してもうひとつ考察が必要であったのではなからうか。もちろん、報告者は、「料理する」という意味の *Pisemek* には煮ることも焼くこともふくまれている」とは述べておられる。ここには「料理する」とは「火の使用」が自明のこととして言及されていないのだろうかしかし、これは注意を要すること、ちなみに私が調査したセネガルのフルベ族にあって「料理する」という行為は *dele* という語幹であらわされるが、これは正確には「火を使って煮る」ことを意味する。つまり、肉や野菜をいためたり、煮たりするのは *dele* で表わされるが、同時に、食事とは考えられない午後四〜五時頃、談笑しながらとる茶にも *dele* という語が使われる。(セネガルでは緑茶の葉をぐつぐつ煮る) 他方、朝食として出されるトゥジンビエの粉に牛乳をかけただけの食事に際しては、*dele* という語は用いないのである。つまり、料理と食事とは必ずしも直結しないと言えるかと思う。スイスの都会人は朝食としてオート麦に干しアブリコット、ナツメ、干しブドウ、干しイチヂク、バナナ、オレンジ、リンゴなどを入れ、それにヨー

グルトをかけ、砂糖少量を入れ、こねまわしたものを好んで食べる。まさに裕福な感を与える豪華な食事ではあるが、これもフルベに言わせると「料理」ではない。もっとも「料理」という日本語の意味を正確に定義しないと私の言うことも意味をなさないのであるが、「雑事をうまく料理する」などという表現があることを考えると、日本語での料理は火がなくても可能なのである。

又、松原氏はトルコの村で「直接火で焼く料理技法がほとんどみられない」ことに着目し、「煮たもの」と「焼いたもの」という問題を「通文化的な枠組のひろがりのなかで、あらためてとりあつかいなおしてみるのは必要」を感じておられる。これは私も全く同意する点であるが、再びフルベに關して言うなら、「煮る」行為は女の仕事であり、(但し、茶を煮る行為は男も行い、むしろ男の方がうまいと言われたりする)「焼く」行為は男の仕事であるという点を考えると、「煮る」と「焼く」に關して「通文化的」よりもまず先に一つの文化内ではつきり見定めておく必要があるのではなからうか。フルベ族では客人に対し、動物(主

に羊)を殺して肉をふるまうが、女が煮料理をするのに対し、動物の肝——時に少量の脇肉をそえることもある——だけは別に男が直接まき火にのせてあぶり、客に提供する。つまり、私の言いたいのは、料理という仕事に関する性の分化をとおして、一つの文化がもつシンボリックな世界観を考える糸口になりうるのではないかということである。

さて、方法的にみた場合、本書中の諸論文はヨーロッパ社会・文化のモデルをさぐりだそうとするものであろう。モデルの抽出という意味では、先にあげた三つの論文はいずれも成功した例である。しかし、別の論文中、たとえば、「テレビと自家用車の普及率はこの村の富裕度を計る一つのめどになるだろう」(p. 324)というような記述にであうと、このような観点では再び、ヨーロッパに追いついた、追い越したはなしにもどるだけで本当の理解はできないという感が強い。

もうひとつ、ヨーロッパという文明社会のモデルを抽出しようとする時、各国ごとの構造的な分析だけで事足りるというわけにはいかないのではないか。近代ヨーロッパ

は各国が多かれ少なかれ植民地支配によりかかって成立していることは断言してよからう。また、個人的見聞にもづいて言えば現代ヨーロッパは旧植民地にあいかわらずのしかかって生活しているのみならず、さらにはヨーロッパ内での南北構造をすでにはっきりつくつていと思う。「イタリア中部山村……」、及び、「カタロニア……」の論文中ではごくわずかながら国外移住の問題がみえてい。が、いずれも挿話的記述にとどめられている。しかし、現在、ヨーロッパ内での国外出稼ぎ、つまり、ポルトガル、スペイン、イタリア、ユーゴスラヴィアなどの国から、フランス、イギリス、ドイツ、スイスなどへの出稼ぎ移住は全ヨーロッパの産業構造にすっかりはまこんだものとなっている。搾取する豊かな国、国内政治の貧困を出稼ぎでまかなう貧しい国というようなヨーロッパ全体の偏形構造は日本では、一体、どの程度、知られているのだろうか。本書の目的とするところではないが、各国間の経済関係をひとわたりみておく必要もあつたろう。経済的要因から社会問題が生じるのはいうまでもなく、それは特殊な言語問題までひきおこす

からである。(「カタロニア……」を参照。) 会田先生はヨーロッパ社会の「根底には現代化への本能的な拒絶反応がある」といわれ、私もある面ではわかる気持があるのであるが、しかし、そのヨーロッパがコンコルドを作っているのである。思うに、ヨーロッパの社会には、上層と下層の断絶をあたりまえのものとして認める「伝統」がある。南北構造もあつて、あたりまえと双方(南・北)が考えているふしがある。それでいて双方が互いに影響しあわずにはないことを考えると、静的モデルのみならず、今後のヨーロッパ研究には動的研究も必要だろう。

最後に、誤植がかなり目立つこと、及び桑原先生が、対話の中でユージェヌ・モラン(p. 101)と言っておられるのはエドガー・モランであることを付記したい。

ともかく、この本を読んだ後、人はヨーロッパをさらに「探検」したくなるであろう。その意味でヨーロッパ研究の一つの道標となる本である。

(国立民族学博物館助手・小川 了)

林巳奈夫編『漢代の文物』

(B4判、五九二頁、図版三三三頁、京大人文科学研究所)

この本の発行の日付は昭和五十一年十二月十五日になっています。その日から一年をすぎた師走もかなりおしつまったころこの六〇〇ページもある大冊の書評をたのまれました。年末年始のドサクサをはさんで、一月そうそうに仕上げてほしいというのです。無茶な注文というほかはありません。

しかしその無茶な注文を、当方は二つ返事で引きうけたのです。すでに目を通していたからではありません。いたいたときから目を通したいと思いつつ、じっくりつきあう機会がなかったので、この機会に思ったのです。

やはり、引きうけてよかったと思います。これは実にすばらしい本です。研究所の共同研究の成果としても、おそらく、最高度に意義ある業績の一つでないでしょうか。

私は人文村の慣行をめぐって、この本の編者林さんと衝突をしたことがあり、奇妙

なことに、そのときの激論を通して、林さんの一風変わった筋の通し方に興味をおぼえるようになり、その流儀が、少くとも学問の世界では、日本の風土に育ちにくい硬質の合理主義として威力を発揮することを認するに至りました。こんどの編著にも、頑強といつてよいほどに根深いその哲学が貫徹しているように見受けられました。

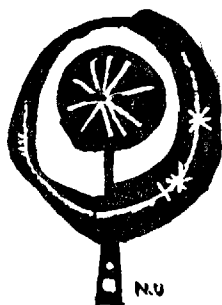
もちろんこれは共同研究の成果であって個人の作品ではありませんから、編者の思想が直接に反映するわけのものではありませんが、共同研究のねらい、研究の方法、成果のまとめ方、などに例の哲学が感じられるのです。

まず、そのねらいですが、漢代の物質文化の体系的把握をめざした点は、その気宇の壮大、照準の適確、讃嘆のほかにありません。序に言う通り、漢代は、先秦時代の文化がそこで集大成され、その成果をふまえて後の文化が展開される巨大な結節点であ

ります。その結節点を物質文化の側面から体系的に照射しようとする今回の試みは、文献を主とする文学や哲学の分野にも、大きな恩恵を与えるにちがいありません。方法、まとめ方については省略。

私は、永い間、抽象や普通の世界になじみすぎてきたせいか、ちかごろ、やたらに多様な個物の世界に魅かれるのですが、こうした心境の私にとって、この本は、おいしいごちそうのぎつしりつまった重箱のようなものです。新年そうそうほろよいきげんでじっくりとしたのしませていただきました。その感想はさまざまあるのに、もう何もかけないのは心残りです。

(上山春平)



飛鳥井雅道『鵲外 その青春』（季刊論叢『日本文化』7）

（A5判、一七三頁、角川書店）

著者は「はしがき」で中野重治のことばを引く。中野によれば、要するに、鵲外は「古い支配勢力の最後の思想的芸術選手」となったのであり、しかもそれが「全く純粹で、ごく自然に行」われたところが肝心の点だ。つまり凡百の立身出世主義的・時局便乗主義的文筆業者とは基本的に異なる、格がちがう、というわけだ。それは確かにそうなのだろうが、その中野の当然すぎるほど当然の立場が、学界では全然問題にされて来なかったそうなのだ。巻末の「解説」（森谷勉久）にも「近代の文学的創造の旗手たらんとした」鵲外と、「近代的陸軍、近代医学の推進者たらんとする」林太郎という、「二重人格性」をふまえた上で、これを究極的に反動よばわりする視点を拒否し、中野重治を批判的に越える労作たることが強調されている。

西欧は知らず、たとえば近代中国文学史上、なるほど鵲外に匹敵する存在を見出そ

うとしても困難のようだ。近代日本の官僚組織の頂点近くにいた・良心的な本物の文学者、その特殊性を専ら衝こうというのは面白い。それだけに、従来の鵲外常軌でないしは文学史的見地からすれば、（文学史上も鵲外自身にも全然無知蒙昧の筆者が想像しても）あえて相当大胆な、あるいは随分むずかしい論断が下されているのではあるまいか。四半世紀鵲外にこだわったつづけた著者としては、もちろん十分な自信を持つてのことにはちがいないまいが。

ごく一、二例をあげれば、「序章 鵲外と林太郎のあいだ」で、「最後の一句」の「お上の事には間違はございますまいから」

上山春平『埋もれた巨像』

（B6判、二六九頁、哲学叢書、岩波書店）

埋もれた巨像とは、上山氏が前者『神々

という娘のことばは、「長州閥の山県や伊藤の遺産をすべてなぎ倒すもの」で、「鵲外・森林太郎」はここで「古い支配勢力とはつきり袂別していた」とされる。同じく序章で、例の「遺言」が細かく分析され、いかなる権力も死に「反抗スル事ヲ得スト信ス」の「信ス」を鵲外の弱さの露呈とする中野に対し、この一語は「彼の主張の表明」で、すべてを悟っていた強さだ、と著者が駁するあたり、特に興味ぶかいが、その立論の過程で、プロレタリア文学者も含め、権力の本質を瞥見することさえなかった状況のなかで、かれは「権力の構造を描ききることができた一人の近代作家だった」と断定される。こうした問題は、とても筆者などが論評のかぎりに非ず。甚だ野心的でポレミクな書物ならんという以上のことは判断を差控えよう。

（荒井 健）

の体系 正・統」で記紀の制作主体として、

また大宝律令編纂の中心人物として、説きつくしてこれた藤原不比等のことに外なりません。本書では、まず八世紀の初めに作られた律令が、実は、明治維新に至るまで正式の国家公法としての面目を保っていた点に着目して、天皇制の三時期区分がなされています。また、中国の正史第一書としての史記が、その冒頭に「革命の哲学」を説くイデオロギー部分を冠しているのに対して、日本の正史第一書としての日本書紀には、冒頭に神代巻がくつつけられて、「非革命の哲学」が説かれており、「革命の哲学」と「非革命の哲学」の相違は、それぞれ制作者たる周公と不比等の政治的意図の相違に帰着することが強調されています。「革命の哲学」が周公の構想にもとづくか否かはしばらく措くとして、不比等が、八世紀初頭に、いわばブレ根拠的な皇位後見の地位にあつて、律令を起草し、都城を造成し、日本型律令の理念を示す記紀の制作を指導したとされる論旨は、納得できました。

ところで、上山氏の古代学は、周知のごとく、梅原猛氏との二人三脚のような恰好ですすめられてきました。その役割分担は

梅原氏が直観、情感的な世界、上山氏は悟性、論理的な世界ということになっていくそうです。書名にしましても、梅原氏の『隠された十字架』『水底の歌』に対して、『神々の体系』が対置されるというわけでしょう。

その上山氏が、予てから、神々の体系を作った人物、体系の背後にある「顔のない人物」の顔を浮び上げようと試み（『歴史の視点』上巻・月報）、また藤原不比等邸あとの法華寺にあるすばらしい、リアルスティックな維摩の像に注目しておられる（『日本学事始』）ことは承知していました。が、本書で、この維摩居士坐像こそ、晩年

の不比等の似姿なのであって、万葉集に見える「しぐれの雨 間無くな降りそ 紅にはへる山の 散らまく惜しも」の仏前唱歌は、この像を前にした維摩講でうたわれたのではなからうか、と述べておられる個所に、私ももっともひかれました。「法華寺の維摩」なる章、『埋もれた巨像』なる題は、上山氏が直観、情感的な世界の住人でもあることを示してくれましたが、氏自身は、本書に「国家論の試み」という副題をかけた、あくまでも悟性、論理的な世界のぬしでありつつけようとしておられるようです。

（磯波 護）

柳田聖山『初期の禪史Ⅱ―歴代法宝記―』（『禪の語録』3）

（A5判、三四九頁、筑摩書房）

禪は菩提達摩（『歴代法宝記』は達摩多羅とする）によって梁代にインドから伝えられたと云われ、以後中国に於て独自の発展を遂げた。一方それが中国周辺部にも流布していたことは、中国禪書がチベット語を始めとする中央アジアの諸言語に翻訳さ

れている事実が雄弁に物語っている。また八世紀末のチベットに於て行われたと云われる中国禪とインド中観派との論争はあまりにも有名である。かくの如く、禪を学ぶ場合（禪に限らず仏教学一般について云えることだが）インド・チベットのそれをも

念頭に置くという広い視野の下に研究を進めることが不可欠である。その意味で、常にインド・チベットとの関係への言及を忘れることなく、また巻末に『歴代法宝記』と古代チベット仏教」と題する小島宏允氏による小論を含む本書の狙いは全く正しい。かくして本書の構成は次の如くである——序論(一一三五頁)・歴代法宝記(三七—三二四頁、原文・読み下し・平易な和訳・注)・上掲小島論文(三二五—三三七頁)・索引(一一二頁)・地図。

歴代法宝記の漢文の読み、その中国禅に於ける位置付けについて、日本はもとよりアメリカ西海岸あたりでは禅の權威として神様扱いされておられると聞く著者に対して、筆者には云うべき何物もない。筆者同様素人のために、同書が「動くのは旗でもなく風でもなく心である」という六祖恵能にまつわる著名な話を最初に伝える文献であることのみ強調しておこう。

小島氏による小論は、チベット禅の専門家の名に恥じず、禅とチベット仏教の関係を述べて簡潔・明晰である。ただ、チベット宗論に閑説されるならこれまでの研究史に一言あって然るべきであったと思う。特

に今枝氏の論文を掲げておられるなら尚更である。即ち、「ラサの宗論」とするドミエヴィル教授説(一九五二)、「サムエの宗論」とするトゥッチ教授説(一九五八)、論争は二度あり、初回は中国禅の勝利、第二回目はインド中観派の勝利とする上山氏説(一九六四)、ラサの宗論でもサムエの宗論でもなく敢えて呼ぶなら「チベットの宗論」

梅原 郁『宋王朝と新文化』(『図説・中国の歴史』5)

(B5判、一九八頁、講談社)

会田雄次先生のお名前を冒頭から挙げるのは恐縮だが、たつた今の、先生の研究会でのホットな発言を引用させていただきたいばかりに、お名前を頂戴することにした。会田先生いわく、「日本には貴族というものはいないんじゃないか。いるのは匹

大馬丁のみで、本物の貴族がない。いわば中国そのものが日本の貴族みたいなものや。」

ナショナリストの小学生としては、こういう話は困るのだが、にわかに反論できぬところが会田式説法の強きである。にわかに

と呼ぶべき一連の議論であったとするドミエヴィル教授最近の説(一九七〇)、そして宗論は後世の歴史書によるフィクションであって史実ではないとする最新の今枝氏説(一九七五)である。しかし、説の最終的決定はさらに慎重を要し、今後の新たな資料の発見に負う部分が多いのが現状である。(御牧克己)

反論できぬ理由はもう一つ、梅原郁先生の『宋王朝と新文化』を読んだ(見た?)せいもある。

われわれ日本文化史をやるものが、いつもひっかかるのは、中国と日本の関係である。ことに日本芸能史などをやると、芸能のかんりの部分が中国文化の影響下にある。日本の伝統芸能のふるさとともいうべき中世、なかんづく室町文化を考えると、色づく影をおとしているのが宋代の文化であった。文化史家も文学史家も、いつも宋代の文化を横目でみながら研究をおっかな

びっくりやってきたところがある。そこへ梅原先生のこの概説書である。あらためて視覚化してみると、やっぱり中国にはかなわんなあー、という気分になる。

中国というのは何でまたあれほどにエネルギーギッシュなのだろうか。梅原先生の目の玉をみていると、なるほどこれでなければ中国はできないと思う。カラーページからグラビアページへと展開される巨大な遺構、華麗な遺品。これでも中国文化の歴史のなかでは地味だというのだからあきれる。なかでも見るほどに飽きないのは「文姫帰漢図」（ボストン美術館蔵）や張挾端「清明上河図巻」（故宫博物院）といった市街風俗図である。日本で十六世紀になってやっとあらわれる洛中洛外図の世界が十一世紀前後に完成しているとは。このよう

な絵画資料による比較文化研究ができればすばらしいだろう。

この図説を堪能しながら、日本中世文化人の眼を考えた。当然のことながら室町文化人は自分の眼で舶載される中国の事物を選取した。その結果、中国で評価の低い牧溪が、日本では中国画家の最高位におかれたことは有名だが、一方では中国にもまればな優品も輸入され大切に扱われてきた。オリジナルなものの伝統がないという意味で貴族はいないかもしれないが、匹夫馬丁なりの筋の通った眼は働いていたはずだ。そのズレをこの書物は随所に指摘してくれる。この上は、何としても自分の眼で中国をみってくるほかはあるまい。今年は私も中国へ行ってみたい。

（熊倉功夫）

熊倉功夫『茶の湯―わが茶の心とかたち』

（教育社歴史新書、
／＼日本史／＼八一）

（新書判、二二三頁、教育社）

独酌という語はあるのに、独喫ないし独茶という語は、未だ寡聞にして、知らない。

飲酒行為で、集団飲酒と独酌とでは、大きな意味の差があるから、強調してこういう

語ができたのだろうか。もちろん、茶のまわしのみという概念があるとすれば、差は認めているのかも知れない。ところで、ひとりでくつろぎを求めて飲む茶に対して、二人以上の喫茶行為に、飲酒と同様ある種の社交的意味を与えている例は、古今広く各地域に見出される。ただヨーロッパなどでのコーヒ―・シヨップやバーでの社交的喫茶は、わたしにいつくろぎを求めたらしななかった。アラブ諸国で、茶室に招じられての茶会で、主人は客人にみごとな点前を演じてみせたが、日本茶道の秘儀性も身振りの象徴化もなく、まさにコックの手さばきのうまさを披露しているのに似ていた。ただそれらの差はあるにせよ、社交的なある種の交流は実現されているのだから、と思うと、社交にもまったく種々の形式があるのだなと考えさせられる。

著者は、茶道史と銘うった書物は汗牛充棟の感がある、といっている。名著も多いのに、さらに一書を加えるのには、芸能史として茶道史を分析したいからだといっている。いや社会的芸能、といった方が本書の正しい理解だろう。読ませていただいて、にじり口と廻しのみを論じた一章、茶会構

造の変遷を論じ、時間的空間的セッティングの変遷の中での、役柄関係の変化を浮ぼりにした二章、立居振舞いを論じた三章を

きわめて興味深く読んだ。史論としての書評は、専門家にしていたくことにして、現象論的社会史への興味ある材料と視角を

提供したものととして、関心ある読者へぜひおすすめしたい書物である。

(谷 泰)

東洋学文献センター

昭和五十二年度(第六回)

漢籍担当職員講習会

文部省学術国際局情報図書館課と本所附属東洋学文献センターが共催する五十二年度の講習会は、三十三名の全国のライブラリアンを受講者に、六月二十七日から七月二日まで、同センター閲覧室を会場として行われた。

下記の講師のほか、実習指導員としては、本所の勝村哲也、池田秀三、夫馬進、秋山元秀、茂木信之、森正次、鈴間智弘、田中久子、島本澄子等が当った。また第三日には本学附属図書館を見学し、展示された同館所蔵の、日本・中国の各時代の代表的な版本について、職員より説明をきいた。

第一日

中国の書物について
漢籍整理法について

森 鹿三
倉田淳之助

第二日

経部書
史部書

川勝 義雄
砺波 護

第三日

カードの作り方「A」

小国 健一
高橋 夏江

第四日

京都大学附属図書館見学
現代中国の書物をめぐって

竹内 実

子部書

梅原 郁

第五日

カードの作り方「B」

今井 清

集部書・叢書

荒井 健

第六日

討議及び情報交換

座長 尾崎雄二郎

日本人のいいかげんさ

——「日本帝国主義の朝鮮支配」研究班——

毎週、朝鮮近代史の共同研究をやっている、つくづく思うのは、朝鮮人にくらべて、なんと日本人はいいかげんな民族であるか、ということである。

たとえば、李朝と江戸時代は、ともに朱子学が支配者によって正統な学問とされていた時代であるが、いつの時代でも、正統があれば異端がある。日本でも寛政に異学禁止令が幕府によって出されるが、しかし、陽明学をやったところで、別に、どうということはない。ところが、李朝では、朱子学以外のものをやれば、投獄され、ばあいによっては死刑にさえ処せられる。まことにきびしいものである。

大体、日本人は、幼児の七五三は神道(神社)、結婚式はキリスト教、葬式は佛式で行う民族である。思想のために死刑になるなどというアホらしいことは、ほとんどしない。ところが、朝鮮人は思想にたいするロヤリティーがきわめて高く、たとえば日帝時代、神社参拜を拒否し

て投獄されたり殉教したりしたキリスト者を多く出したが、日本で神社参拜を拒否して殉教したというキリスト者を、私は一人も知らない。

江戸幕府も李朝も鎖国を行った。けれども、日本のばあいには、鎖国とはいっても、オランダ船や中国船が、毎年、定期的に長崎に来て、いろんな物資や思想をもたらした。書物も、キリスト教関係のものは禁圧されていたが、それ以外のものなら、ほとんど自由に輸入された。だから、蘭学の名の下に、西洋の自然科学や医学などが日本に導入され、世界の動向にも日本人の耳目が開かれていた。ところが、李朝の鎖国は、ほんとうの鎖国であった。西洋人の来訪を一切、拒否したばかりでなく西洋の書物の輸入もキリスト教にかぎらず一切禁止した。だから、李朝末期になって、西洋と接触せざるを得なくなつたとき、幕末の日本人とはちがつて、西洋にたいする知識はほとんどゼロといってよかった。これが、結局、李朝を「日韓併合」にまで追い込んだ一つの有力な理由であった。私たちの研究班でも、日本人のいいかげんさが恥しいと日本人の班員がいうと、朝鮮人の班員の中には、そのいいかげんさがうらやましいという人もある。

(飯沼二郎)

文献を反みて縮くんば

——「清代経学」研究班——

突然、共同研究の周辺という題で、「清代経学の研究」班を千字で紹介せよとの仰せである。困惑しつつ惟みるに、千字で真実を過不足なく伝えるなどは、玄黄なる天地、洪荒たる宇宙の道理を知らざる身の能くする所に非ずと。だけど……

抑々「周辺」とは何の謂ぞや。曰く、ソレ周ハ徧也至也終也密也曲也忠信也。スナワチ所有物ニツブサニミソカニ即キキワメツクシテ誠アルコトゾ。辺ハ境也旁也。スナワチ遠近也天地也。之ヲ合セ云エバ、周辺トハ天地ノ全テヲ知リツクスコト也、此格物致知也、忠信ノ行也。聖人ノ道ハコノ二字中ニ存ス。我何ゾ敢テ之ニ当ラシヤ。

紙面の無駄使いと御叱りを蒙りそうだが、一步誤まれればこれに類することも起り得るのが経学の世界なのである。

清朝考証学があのようない見事な成果を挙げ得たのは、周知の如く、実事求是の態度を保持し続けたからであっ

た。が、これまではその外面的態度のみが注目され、内面性は軽視されてきたように思われる。実事求是の底には、切実な社会への対応と生き方の追求があり、誠実な思想的営為がある。我々が清朝経学を研究しようとするのは、彼らの生き方・思想に共感するからである。但し彼らが自己の言葉ではなく経書の言葉を以って語ったように、我々も彼らの言葉を以って語らねばならない。

現在の具体的状況を次に述べよう。当班では顧炎武の『日知録』を最初から読んでいる。一字一句も疎かにせず訳注を作成しているので、二年間でようやく巻一易を読みおえた所である。別班の『音論』は読了でやはり訳注が準備されている。清朝経学の代表として顧炎武を取上げるのには異論があるかもしれない。これには当班が東方部助手研究会よりの発展であるという事情等もあるが、上述の観点より見れば彼ほどふさわしい人は他にないとも言えよう。尤も適当過ぎてその体臭に辟易させられることも多いけれど。

私個人としては、衰退気味の経学が少しでも復興するという喜び（と聊かのとまどい）を禁じ得ない。何しろ班員の人数が私の予想に反して増えているのだから。

仄聞する所によれば、この研究班の発足を最も喜んだのは百万遍の某書肆と某有名新聞社ということだ。これこそ其の「周辺」であろうか。

（池田秀三）

奇妙な文化のたわむれへの眼差し

——「生活様式と関係行動」研究班——

エリザベス・テイラーが画面に現われて、「あらジャック、もう来ていたの」、と日本語で発話しても、なんら奇妙な印象をいだかずに、わたしたちはテレビ洋画面をながめている。欧米人にとり、それは奇妙な取合せ以外のなものでもない。ところが日本在住外人で、日本語の上手な人は、変な外人という評価をうける。おなじ欧米人が日本語を発話している現象なのに、この反応の差はどういうコンテキストの差を裏にはらんでいるのか。インター・カルチュラルな場面は、近時ますます世界のいたるところで観察されるようになった。そこでコンフリクトや融合にのみとどまらぬ、興味ある反応が生じている。こういうときわたしたちは、これらの奇妙な文化のたわむれの背後にまで分け入りたい気にさそわれる。

従来、文化というと、なにか基底文化、伝統文化、伝統的生活様式、土着文化という語で等しく指示されていた

る、文化的なものかが、知る価値のあるものとされてきた。それは、文化要素の皮むきの比較選別作業を含む。しかし文化はそんなことで十分に記述できるだろうか。いかなる言語もクレオール的だという云い方があるが、文化も、それに似た異物相互のすり合せの結果生じたクレオールのコードだと考えれば、コード生成の論理を、具体にに応じて明らかにする作業が重要となる。関係行動とは、このような問題へも射程をもつ接近枠として措定したのだったが、果してうまく関係づけられるかどうか。これは今後のお楽しみと、われわれ一同見守っているというのが実状である。

(谷 泰)



旅

クサンテンの遺蹟公園

林 巳奈夫

デュイスブルクで乗りかえたクレューヴェ行の鈍行車窓には麦畑や牧草畑が広々とひろがり、農村が現れては消える。畑のずっと向うに時々工場の煙突が見えてくるのは、その辺をライン河が流れていることを示すのだろう。六月中旬の日曜日、ケルンの東洋美術館の人のすすめで、オランダ国境に近い、クサンテンに新たに公開された、ローマ時代の城塞の遺蹟公園を見に出かけて来たのだ。工場の煙突もやがて現れなくなり、単調な田園風景が小一時間もつづいた。がらんとした車からは人が降りてゆく一方だ。クサンテンで降りたのは私を入れて三人。小さな駅舎を出た所は、リンデンパウムの並木を挟んだ小ざれいな住宅地で、休日のせいか通行人も見えない。家の前で自動車の手入れをしながら立話しをしている男を見附け、遺蹟公園への道をきく。要所々々の目標も混えて懇切に教えてくれた。大変きき取り易いドイツ語で助かった。教わった通りの道をたどって煉瓦作りの聚落の中を抜け、

広い自動車道路に出る。道の向うは広々した畑で、日曜のせいか道路にも車が見えない。道を横切って少し行くと、畑の中に大きな看板が立っていた。急ごしらえの畑をならしただけの駐車場には、かなりの数の車が止っていた。大体、汽車で来る所ではないらしい。

遺蹟公園は発掘調査したあとに復原された城塞だ。空濠をめぐらせた内側に、真新しい煉瓦積みみの城壁が五〇〇メートルばかりの長さにつらなり、隅には物見の塔が立ち、木の扉のついた城門もある。ライン河沿いに作られたローマ時代の城塞の一つ、コロニア・ウルビア・トラヤナの一部を復原したものという。中に入ると整地されたむき出しの土の中に見学道路が作られている。道路わきに先ず、発掘されたローマ時代の導水溝が置いてある。小石を漆喰で固めた丈夫なものだ。小規模な円形劇場も修復中だった。そばには当時使われた巨大な木製起重機の複製が据えられていた。滑車の縄はしっかりとくくられていて動かせない。子供達が大勢よじ登って遊んでいた。城壁の隅の物見の塔は上れるようになっていて、中にはローマ時代の発掘品が若干展示されていた。その他には、井戸とか復原されたジュピター像の立つ石柱がある位で、発掘中の所は入れないようになっているし、遙々来てみたものの見る所もない。見学用道路のわきの新たにならされた地表には、雨に洗い出されて、塔の中に陳列されていたのと同じの土器やガラス器の小片がちらちらと見える。本性を出して採集にとりかかったはいが、間もなく前日の雨をたっぷり含んだやわらかい泥に、足首までふみ込んでしまった。道から外れないで下さいという立て札の存在には後から気がついた。

次の日、ケルンでクサンテンに行つて来た話をしたら、外国人で訪れたのは私が最初だろう、ということだった。然しまあわざわざ行く程のこともない所だ。

月と夜光貝

松井 健

……午前中、集落背後の山へ登る。できれば、マタレム山まで行つて、原生林の様子を見たいと考える。海岸沿いを四キロほど南へ歩いて、稜線に沿つた道を登る。一面草原、ところどころにサツマイモの畑がある。沢沿いには、陸稲やタロイモや野菜の畑がひらかれている。コヤシやヒラミレモンの木も見える。

草地は過放牧で、ススキも生えていない。牛が二、三十メートルごとにくぐられていて、まったく暑くてやりきれないという顔をしている。バタン島、フィリピンのルソン島から北へブローペラ機で三時間。フィリピンと台湾の間にある孤島。はるか北にかすむイトバヤット島と、すぐ西に手にとるようにみえるサブタン島とで、バタネス州をつくる。島内では、今南の方へ走つていったスクラップのようなボロバスが唯一の公共の交通手段である。

畑の分布、作物の種類、地形、植生について大体をスケッチする。ヤムイモ畑はかならず急斜面につくられ、掘棒耕作がおこな

われている。それぞれの畑は、うまく家畜の侵入を防ぐようにひらかれている。などなどいくつかのことを注記しておく。

途中で、下宿の主人であるヴァロネス氏のめいにあたる女の子に出会つて、道をたずね、ようやく帰りつく。午後は、遊びに来たアセベス氏をつかまえて、貝の名前の採集。スイジガイという大きな巻貝の名をたずねると、ババガットと答える。バガットは牛のことだ。はじめてのフィールド・ワークで沖繩の野甫島へ行つたときも、そこでこの貝のことをウシとかウンポと呼んでいたのを思い出す。もう六年も前のことだ。この貝のもっている管状棘を角にみたてるのは、沖繩でもバタン島でも同じらしい。

全般にバタン島での貝の分類のしかたが、沖繩の人たちのそれに似ているのには感心させられる。夜光貝のフタの名前を聞いてみる。ヴォハン。サザエのようなフタがあるが（当然だ、サザエも夜光貝もリュウテン科だ）、夜光貝のフタは直径十センチ以上もあつて、まっ白だ。

それが、ヴォハン、すなわち月と同じ言葉で呼ばれているわけだ。真珠光沢の美しい巻貝、その夜光貝のフタが月なのか。何と詩的なことか、としきりに感心する僕に、アセベス氏はニヤリとして付け加える。「この言葉では、膝小僧もヴォハンと言っただけ……。」



《中国の旅から》

1. 大連の夜

深沢 一幸

一万トンの「耀華号」が、劇作家依田義賢氏を団長とする「京都府民日中友好の船訪中団」の、空前の四七七名をのせ、舞鶴を出てから二日あまり、大連についたのは、八月三日午後五時半だった。船籍は中国だが建造はフランスの客船であり、私は連日、焼けつくような陽光のもと、甲板のデッキ・チェアーにねそべっていたわけだが、暮れなずむ大連港に入るやいなや状況は一変した。まず夏とは思えぬほど肌寒い風が吹き、それまでの半袖シャツではとてもがまんできない。さらに、検疫船やタグ・ボートが接近するたびに、底から黄色い泥が雲のようにわきあがる、それまでの青海原とは似てもつかぬ海があった。さらに「港内は撮影禁止」という指示を破ったため、フィルムを巻きあげられた人も出て、船内に入ってきた人民解放軍兵上たちの固い表情に、いささか緊張もした。

やがて検疫が終ると、以後は恒例になった突然の予定変更で、

明朝上陸が、すぐさま上陸ということになった。大連駅とここだけは戦前と変わらぬと元兵士が述べた大連港の石だたみを踏み、倉庫の壁にのこる四人組批判のポスターを横目でみながら、岸壁の上を一面に埋めつくした大連の小・中学生たちの踊りで揺れる赤い波と、「熱烈歓迎、日本朋友」の湧きあがるようなかけ声の間を通りぬけた。ぬけたそのむこうでも、夥しい人びとが鈴なりになってこちらを見ている。私は圧倒される思いで、マイクロ・バスにのり、夕やみにすっぱり包みこまれた大連の市街に入っていた。ゆったりした通りの両側は、いかにもロシア風のレンガ造りの重厚なビルが、新劇の書き割りのようなシルエットを浮かびあがらせている。中山広場前の人民文化クラブについては、七時四十五分。華国鋒支持スローガンの張られた、一昔前の映画館のような会場で、旅大市革命委員会主催の「文芸晚会」として体育専門学院の小中学生による雑技を観覧する。まず赤いネッカチーフをまいたかわいらしい紅小兵の少女が、手を頭上に大きくふりあげる中国独特の敬礼であいさつすると、私はいささか興奮した。登場する少年少女たちは、みなアマチュアと思えぬ完璧な演技をみせ、自転車乗りの少女がスリッパで転倒した時には、かえって現実と確認できるほどだ。しかし特に印象的だったのは、自転車に乗り片脚で頭上に碗をほうり上げる少女の、失敗による疲労にもめげず四回やりなおした姿であり、成功しなければ永遠にやりなおしただろうと思えるそのひたむきさは、今の中国の何かを暗示していると私は感じた。プログラムはたちまち終ったが、大人のあいさつは全く無かった。

2. はずかしかったこと

飯 沼 二 郎

七月に半月間、日中農業農民交流協会と関西国際旅行社による農民訪中団に参加して、中国の農業を視察することができた。団員は三十名、神戸大学の堀尾夫妻と私とを除けば、あとは全員、関西と九州の農民であった。あらかじめ、私たちの希望を先方によく伝えておいたので、旅行中、私たちの希望は充分に満たされた。(中国の秘密主義を非難する人が往々にしてあるが、あれは、中国に行ってから、いろいろ希望を申し入れるからではないだろうか)。

わずか二週間ではあったが、観光は故宮と長城だけで、あとはほとんど人民公社の視察に時間を費した。国はちがっても、日本と中国とでは農業がよく似ているので、人民公社では、どこでも団員である日本の農民からの質問が尽きず、訪問時間が足りないというありさまであった。

どこも「熱烈歓迎」で、北京師範大学と上海の労働者新村の幼稚園では、かわいい子供達が、私たちのために、歌をうたったり踊りをおどってくれたりした。日本語で「春が来た」とか「ソーラン節」まで歌ってくれば、日本人として、いい気持にならざるを得ない。そこで、団員の一人が大失敗をした。

行く前に、日本人は十五年間も中国にたいして侵略戦争を何千万の中国人に被害をあたえたが、しかし現在の中国人は、「あれは日本帝国主義がやったこと。私たち中国と日本の人民は、ともに日本帝国主義の犠牲者だ」といつてくれているから、表面的には反日感情はみられないが、しかし、それだからといって、いい気になってはいけないという注意があった。しかし、「熱烈歓迎」をうけている間に、私たちは、しだいに、この注意を忘れていった。

最後の上海に来たとき、終始、私たちの団についてくれたひょうきんな中国人の通訳さんに、団員の一人が、自分がかつて兵隊として上海にいたときの兵舎の跡をみたいといった。この人は、六年間、日本軍の一兵士として上海にいたのである。

通訳さんは、どうして兵舎の跡がみたいのかと質問した。その人は、「なつかしいから」と答えた。通訳さんは、涙を流して怒った。「あなたのなつかしいというのは、たとえば上海で生れて少年時代を過したというような、なつかしさとは違う。あなたのそのなつかしいという言葉は、死ぬまで忘れることができないだろう」と、通訳さんはいったという。



3. 江南瑣記

吉田 光邦

中国江南は緑の世界である。いちめんの水田は整然と区画されていて、土地の分合作業が一通り終了していることを思わせる。

そのなかの道を、朝まだうす暗いうちから、水桶を担った人影が動く。それはかつて西アジアの地でしばしば見たオアシスの朝を思い出させた。女性たちが手に手に水瓶をもって早朝に水汲みにかけてその姿を。

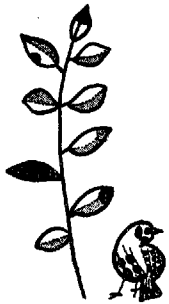
しかし灌漑の機械化はさほど進んではいなかった。人工の水路はいたるところにみられたけれど、古典的な龍骨車がまだ幾台も活動していた。耕地の分合や、水稻品種の整理が、ようやく終わったという感じである。ある人民公社では、早稲四種、晚稲四種に品質を固定化させることができたと言っていた。尤もわたしの中国の旅も、広州、長沙、桂林と巨大な中国の一毛にも似た世界ではあるけれど。

名高い石湾の陶業地はすっかり変貌していた。今世紀はじめまで記録された、ここの特徴あるロクロ作業は見られない。その代りに石膏型による鋳込み成型が全盛である。より早く、より大量に、生活用品を民衆に供給せねばならぬ現実であってみれば、こ

うした量産体系への転換はやむを得ぬことではあろうか。しかしそれは一面では、歴史的な中国陶磁器のもつ鋭いまでの造型性、せんさいな絵画性を失わせてしまう。それらの特質を、どのようにして近代的な生産体系のなかに再現するか。それは世界のどこにもある共通の課題である。工業社会化と手仕事の問題として。しかしのちに見た長沙の磁器工場の仕事には、いくぶんの伝統性は保たれていた。

二週間というあわただしい旅であつたけれど、さすが深い歴史の地である。桂林の自然は、莫休符の「桂林風土記」、周去非の「嶺外代答」の記述のいくらかを、そのままに思い起させる。それにつづく灕江の沿岸の風景は、そのまま南宗画の山水である。流れてゆく竹舟、篙舟、そして竹林の連なり、すべてはおだやかに閑雅な風物である。

桂林でみた「紅岩」の劇はなかなかの観ものだった。古典劇のタイプをとりつつ、リアルに革命前夜を描き出す。ただメークアップはまずい。何なら技法を半日教えましようかと、通訳のひとと竹いあったことである。そして長沙では鉄をふたつほど買った。指環の部分がぐっと外にそる、あの古いタイプはみられなかったがそれでも刃の厚い、一見して手打ちとわかるいいものであった。



4. 桂林—金木犀と鍾乳洞と墓

江 村 治 樹

桂林の「桂」とは、「桂花」、すなわち金木犀 (*Osmanthus fragrans*) のことであるという。確かに、桂林の町の東郊、龍隱岩の入口には、まだ花は咲いていなかったが、高さ二メートルばかりの金木犀の並木があった。ただ、宋代に著された『桂海虞衡志』によると、桂林は桂をその地名としているが、ここには産しないと言う。しかし、この書によると、桂は南方の奇木であり、葉の中心の葉脈が二本で、「圭」の形をしているというから、金木犀ではありえない。桂林の町を大分うろつきまわったが、ここ以外ついに金木犀をみなかった。龍隱岩の金木犀もあとのこのじつげの可能性がある。ただ、土地の通訳によると、桂林に金木犀のりっぱな群落がないのは、この木が短期間で代替りするからだという。しかし、そう説明されても、やはり桂林の地名の由来は納得できずじまいであった。

桂林では到着早々、西北郊にある、蘆笛岩という鍾乳洞につれていかれた。洞内は赤や青の照明に照らされ、鍾乳石や石筍などに様々な名前がつけられている点など、日本などと変りはない。ただ、その説明に現代的な教訓を含ませているなどやはり中国らしい。しかし、単に地上の景色にみたり、牽牛や織女など伝説をからませている場合もかなりあった。そして、出口近くには

参観者を見送る「雄獅」などがあり、お客に対するこまやかな配慮も忘れられてはいなかった。この鍾乳洞は、桂林附近ではどこでもみられる奇峰の内部にあるが、そうした奇峰のほとんどが鍾乳洞になっているという。そして、町に近い浅い洞穴には、唐代以降の碑刻や摩崖仏が多く残されている。桂林の町は、古くから文人の足跡がいたるところに印され、蘆笛岩のような奥深い鍾乳洞の中にも、文人による落書があつたりする。

桂林の一口、その下流八三キロメートルにある陽朔まで七時間かけて川下りをした。その奇観はさすがであつたがすぐにあきてしまい、沿岸の村落や人々の様子などの方がよほど興味深かつた。陽朔からの帰りはバスで一時間半ほどである。その沿道には直径数メートルばかりの土饅頭がいたるところにみとめられた。別に墓域があるわけではなく、無秩序に十墓前後づつまとまって散在している感じである。墓は上中下等の三種に分類できるようなのであるが、みな墓前には石の門らしきものが建てられている。これらの墓は、耕地に比べてもかなりの面積を占めているように思われた。数日前、上空からながめた河北大平野は、集落と田畑と河川水路が見渡すかぎり延々と広がり、森や空地らしきものは全然見出しえなかったのとは対象的であつた。しかし、このあたりでも、老人が死ぬとまだこのような墓を造ることもあるが、しだいに火葬に変わりつつあるとのことであつた。墓白体、それほど手入れされていない様子であつたから、死生観に対する変化がおきていることは確かであろう。宗教の問題は、なるべく無用な摩擦を避けて気長にとりくまれている印象であつた。

(一九七七年九月、日本美術家友好参観団に参加して)

お客さま

七月二七日(水)

アメリカ、エール大学教授

スタンレー・ワインシュタイン氏

「偽経研究」受贈挨拶のため。日本仏教

史の専攻。

八月三日(水)

カナダ、ブリティッシュ・コロンビア大学

教授

レオン・ハーヴィッツ氏

昭和二六年より約八年滞在後、二〇数年

ぶりの来訪。

八月二三日(火)

モスクワ大学言語学部教授

ニコラエフ氏

一〇月七日(金)

カナダ・マックギル大学東アジア研究所

長

一〇月二四日(月)

ポーランド・リン教授

オーストラリア・グリフィス大学副学長

十一月七日(月)

デンマーク・コペンハーゲン大学教授

グラマン氏

東方学会との共催講演会

「一七世紀における日本の銅とヨーロッパのパワーポリティクス」

人のうごき

○熊倉功夫助手(日本部)は講師に昇任。

(六月二六日付)

○中村賢二郎助教授(西洋部)は教授に昇任。(一〇月一日付)

○古田光邦教授は、六月七日伊丹発、広州

博物館、石湾陶器工場、桂林絹織物工場、

馬王堆、湖南省博物館で陶器工芸に関する調査及び資料収集を終え、六月一九日

帰国。

○飯沼二郎教授は、六月三〇日福岡発、北

京農業科学試験所、鄭州農産物処理工場、

復旦大学で農業調査及び資料収集を終え、

七月一三日帰国。

○前川和也助手は、六月二七日羽田発、コ

レージュ・ド・フランスで第二回国際

アッシリア学会に出席、ミュンヘン大学

等で資料収集し、七月二二日帰国。

○谷 泰助教授は、七月一五日羽田発、カ

ブル周辺、ローマ、ベオグラード大学

等有畜社会の比較文化的研究(予備調

査)を終え九月九日帰国。

○小野和子講師、深沢一幸助手は、八月一

日舞鶴港発、大連の水産公司、北京大学

故宫博物館等で現代中国の実情調査及び

資料収集を終え、同月一五日帰国。

○田中 淡助手は、八月九日羽田発、北京

の頤和園、大同の華嚴寺、龍門石窟等で

歴史的都市及び建築に関する研究調査を

終え、同月二三日帰国。

○江村治樹助手は、九月六日羽田発、故宮

博物館・靈渠遺跡・広州博物館等で、美

術及び考古学に関する研究調査を終え、

同月二二日帰国。

○小野和子講師は、九月二七日羽田発、日

本社会科学者友好参観団員の一人として

北京大学社会科学学院・大慶油田・延安の

革命博物館等で、現代中国における社会

科学の調査及び資料収集を終え、一〇月

二八日帰国。

○横山俊夫助手は、一〇月三日羽田発、再

度、オックスフォード大学で一九世紀の

日英史研究及び資料収集し、五三年九月

三〇日帰国予定。

外国人研修員

郭麗英

大谷大学修士取得

中国仏教史

指導教官 柳田教授

期間 五二年五月～五三年四月

Howard J. Wechsler イリノイ大学助教

授

中国思想

指導教官 砺波助教

期間 五二年五月～同年六月

Dennerline Jerry P. ボモナ大学助教

明清時代政治社会史研究

指導教官 小野講師

期間 五二年七月～同年八月

Panteelis Ellis Timios ミシガン大学院生

漢代近境政策について

指導教官 川勝教授

期間 五二年七月～同年十二月

Constance Johnson ペンシルバニア大学

院生

宋代の任官制度について

指導教官 梅原助教

期間 五二年八月～同年十二月

John. D. Langlois ボードウィン・カレッジ助教

ミチ助教

宋から明への政治思想及び法制の研究

指導教官 梅原助教

期間 五二年九月～五三年八月

Peter K. Bol プリンストン大学院生

宋代地方政治史の研究

指導教官 梅原助教

期間 五二年九月～五三年八月

Carl Bielefeldt バークレイ大学院生

正法眼蔵

指導教官 柳田教授

期間 五二年十二月～五三年十一月

招へい外国人学者

Chester Wang ウィスコンシン・マディソン大学助教

中国歴史

(竹内教授)

期間 五二年一月～同年十二月

何朋 香港中文大学崇基学院講師

江戸末期・明治初期における日中文化交流の研究

(尾崎教授)

期間 五二年一〇月～五三年三月

おくりもの

- 川勝義雄教授は、フランスで教育功労章 (l'ordre des palmes Academiques) シュヴァリエ章 (Au grade de Chevalier) 勲章を受章された。

- 林屋辰三郎教授は京都市史編集所の『京都の歴史』編集グループの代表者として京都新聞社五大賞を五二年二月二十四日授与された。
- 桑原名譽教授は芸術院会員。
- 坂田吉雄名譽教授は生存者叙勲勲三等に叙し、旭日中綬章を授ける。五二年二月二日に教育会館で受章式があった。

書いたもの一覧

一九七七年六月～十二月
(五十音順、●印は単行本)



・会田雄次

正論

サンケイ新聞

六月～十一月(月一回)

魔女の一撃——北政所と関ヶ原合戦——

季刊・歴史と文学 九月号

・飛鳥井雅道

West in Japan's Enlightenment

Extended Wheel

Summer 1977

近代の相克(『日本文化史』2)

有斐閣 一〇月

三遊亭円朝と近代

歴史公論 一〇月

・荒井健

銭鍾書『包囲された砦』第三章・上(訳)

颯風 一〇号 一〇月

・飯沼二郎

複合経営成立の条件

用水と営農 六月号

伝統に基づく近代化

地域開発 六月号

国立大学教員への道・阻まれる定住外国人

朝日新聞 六月八日

沖縄を語る(一一九)

九州朝日新聞 六月三日～八月二五日

新風土論(一一五)

経済評論 六月号～十一月号

●D・B・グリック『世界農業の形成過程』(共訳・山内豊二・

宇佐美好文と)

大明堂 七月

濃い闇夜ほど星は美しく輝く

京都労演 七月号

●日本農法の提唱

富民協会 七月

●織田檐次『チゲックン』(共編、韓哲曦と)

日本基督教団出版局 七月

座談会・金芝河裁判に関連して(鶴見俊輔らと)

朝鮮人 一四号 七月

在日朝鮮人の国立大学教員への道

同 右

農産物(『講座比較文化』五巻)

研究社 七月

北京のキリスト教会

毎日新聞 八月二〇日

中国の農業を見て

朝日新聞 八月二〇日

座談会・わたしの在日朝鮮・韓国人問題(崔忠植らと)

信徒の友 九月号

「複合経営」の適正規模

用水と営農 九月号

中国農業についての体験

アジア経済旬報 一〇五六号

九月

一つ一つ違う人民公社

日中農交 二九号 九月

中国農業と日本農業

経済評論 一〇月号

先進農業（江戸時代図譜）一八巻

筑摩書房 一〇月

座談会・古代製鉄と朝鮮をめぐる（上田正昭らと）

日本のなかの朝鮮文化 三五号 一〇月

「東亜半月弧」について

民博通信 一号 一〇月

座談会・在日朝鮮人を語る（梶村秀樹らと）

三千里 一二号 一一月

農政の指導性と農民の自立性

農業と経済 一一月号

池田秀三

日本中国学会報 第二九集 一〇月

『法言』の思想

礼記 中（『全釈漢文大系』一三巻）（共訳）

集英社 一一月

今井清

第三世代の学問（共著）

中央公論社 八月

●埋もれた巨像

岩波書店 一〇月

内井惣七

●カルナップ哲学論集（共訳）

紀伊国屋書店 六月

Induction and Causality in a Cellular Space.

PSA 1976, Vol. 2 (ed. by F. Suppe and P. Asquith),

Philosophy of Science Association.

八月

Three-valued Logic with Two Negations.

Zinbun, No. 14. 一一月

梅原郁

宋代の開封と都市制度

鷹陵史学 三・四号 六月

江村治樹

書評・楠山修作『中国古代史論集』

東洋史研究 三六巻二号 九月

書評・貝塚茂樹『中国の古代国家』（貝塚茂樹著作集『第一巻』）

史林 六〇巻六号 一一月

太田武男

●『結納』（叢書民法綜合判例研究）3）

一粒社 八月

小野和子

旧中国における「女工哀史」

アジアレビュー 三一号 九月

瀋陽医学院を訪ねて

中国の教育革命その後

燎原 二号 九月

河野健二

議会政治の経済的基礎

法学セミナー増刊 六月

近代社会における「地域」

地域開発 六月号

後退した先進国イメージ

月刊エコノミスト 七月号

ブルードン主義とは何か（座談会）

現代思想 七月号

現代社会主義論争

朝日ジャーナル 七月二九日号

思想の言葉

思想 八月号

地域主義について

あすあす 一〇月号

地域主義と農村共同体

九州公論 一〇月号

第二帝政とブルジョア化の完成 (『フランス・ブルジョア社会

の成立』所収)

岩波書店 一一月

勝村哲也

『修文殿御覽』新考

鷹陵史学 三・四号 七月

熊倉功夫

食物の歴史

武道 六月—十一月

茶道における近代

茶湯—研究と資料 一三号 九月

茶のふるさとを訪ねて (座談会)

淡交 九月—十一月

●茶の湯

教育社 一〇月

茶入と値段 (根津美術館『茶入』)

一〇月

『愈好齋日記』抄 (一)

武者小路だより 一〇月

東武日記 (校注) (『日本都市生活史料集成』二卷)

一〇月

学習研究社 一〇月

伝統芸能における近代

京都新聞 一一月二五日

阪上孝

ブルードンの歴史観

現代思想 七月号

第二帝政と国民経済観の二類型 (『フランス・ブルジョア社会

の成立』)

岩波書店 一一月

佐々木克

●戊辰戦争と維新政権 (田中彰編『日本史 (6) 近代』1)

有斐閣新書 一一月

竹内実

現代中国への視角——黄埔軍官学校のこと (下) 思想 六月号

天安門城壁の血涙詩

文芸春秋 七月号

中国文学と自由

朝日新聞 八月一八日

華国鋒「政治報告」が触れなかった部分 週間朝日 九月九日号

中国新体制の進路 京都政経文化懇話会「講演要旨」

九月二七日

・多田道太郎

文学と生活空間

NHK大学講座テキスト 八月

暮らしを考える (共編)

ぎょうせい出版 八月

南太平洋サモア

よみうり新聞 九月

風俗学事始 (『現代風俗』)

現代風俗研究会 一〇月

日本語の作法

潮 一〇・一一月

乗合馬車の思想 (『フランス・ブルジョア社会の成立』)

岩波書店 一一月

・谷泰

イエスをめぐる神話的標徴のモデル——地中海地域羊管理バ

タインとのかかわり——

思想 六月号

「立つ」と「坐る」

本 講談社 七月号

書評・北村光二『ニホンザルにおける個体間の特異的近接』

季刊人類学 八卷三号 九月

●新・日本人の心 (共著)

朝日新聞社 一一月

・砺波護

唐代の官制について

高校通信東書国語 一六七号 一〇月

・狭間 直樹

広東辛亥革命の一考察 鷹陵史学 三・四号 七月

中国の社会主義革命と社会主義建設

星星之火(毛沢東思想学院創立十周年記念誌) 九月

五四運動 歴史公論 十一月号

・深沢 一幸 颯風 一〇号 一〇月

浩然・艶陽天・ノート

・林屋 辰三郎 河川美化団体連合 八月

京の流域共同体(『京の川』8) 朝日新聞 十一月四日

琵琶湖の歴史的環境を守ろう

・樋口 謹一 月刊エコノミスト 一〇月号

都市漂泊民の論理と心理 読売新聞 十一月九日夕刊

中江兆民 第二帝政のヨーロッパ外交——ナポレオン三世の戦争と平和

(河野健二編『フランス・ブルジョア社会の成立』所収)

岩波書店 十一月

・古屋 哲夫 歴史公論 八月号

天皇制と帝国議會

・前川 和也 The rent of the tenant-field (gan-APIN, LAL) in Lagash

Zinbun No. 14, 十一月

・松井 健 弘文堂 六月

解説(ニードム『構造と感情』)

トウンブウェ族の民族動物学——エコロジとエピステモロジ

ーの間で——(伊谷・原子編『人類の自然誌』) 雄山閣 十一月

・松田 清 第二帝政の政立とV・ユゴー(『フランス・ブルジョア社会の成立』)

・見市 雅俊 レセップスと第二帝政の外交(『フランス・ブルジョワ社会の成立』)

・御牧 克己 Le Grub mtha' nam b'ag rin chen phren ba de dKon

mehog 'jigs med dba' po (1728-1791), Texte tibétain

édité, avec une introduction' Zinbun No. 14, 十一月

・柳田 聖山

今月のことば 花園 六月—十一月

禅語コーナー 花園 六月—十一月

鎌倉と京都—夢窓疎石の生いたち、その後 禅文化 八五号 六月

六祖壇經諸本集成解説(羅麗馨訳) 食貨(復刊) 七卷四期 七月

●勅修百丈清規左闕・唐峭余録(禅学叢書之八、編集と解題)

夢窓ばなれ—今は雪寶さん 中文出版社 八月

禅文化 八六号 九月

— 35 —

中世文化における禅

歴史公論 三卷一〇号 一〇月

夜明けの心

在家仏教 二八三号 一〇月

●人生と宗教の文学(水上勉との対談集)

日本実業社 一〇月

●夢窓(『日本の禅語録』七)

講談社 一一月

宮風―禅思想史の一つの課題

禅文化研究所紀要 九号 一一月

・山田 慶 児

科学と技術のはざま(『看護技術論』)

メヂカルフレンド社 八月

・山下 正 男

遠近画法と遠近法主義

現代数学 六月号

・吉川 忠 夫

裴松之のこと(一)(『世界古典文学全集』二四卷A、月報)

七月

・吉田 光 邦

●原色染織大辞典(共編著)

淡交社 六月

友禪小考(『友禪』所収)

六月

もめんのはなし

ポエカ 六月

きものの未来(座談)

染色と生活 六月

●技術と日本近代化

日本放送出版協会 六月

●日本人の技術(編著)

研究社 七月

書評『水戸の洋学』

科学朝日 八月

未来のホビー(『染めの本』所収)

八月

●『日本の伝統工芸京都』2(編著)

講談社 八月

●『江戸時代図誌北陸道』2(編著)

筑摩書房 九月

●世界の植物・織りと染め(編著)

朝日新聞社 九月

吉祥文様(『きものと装い』所収)

九月

文明開化の音(『蓄音機百年』所収)

一〇月

●紺・紬(編著)

平凡社 一〇月

ペルシアの金属工芸

カロス 一一月

花器

華道 六一 一一月

工芸時評

染織マンスリー 六一 一一月

両洋の眼

朝日新聞 一一月

・渡部 徹

社会主義運動の展開―ギルドソシアリズムからボルシェビズムへ―

歴史公論 一一月号

(三七頁より) 折角およせ下さったみなさまのご意見を充分に理解し、誌面に反映できたかどうか心もとないが、今後とも、『人文』についてのご意見をどしどし編集委員までおよせ下さるようお願いする。

編集後記

「最近の『人文』の内容がやや硬直化しているというご意見もあり、より楽しいものにしてほしいというご希望もありますので、このさい、編集方針を考え直すためにみなさまの率直なご意見を、ぜひ、お寄せ下さいませようお願い致します」。

一九七〇年一〇月に第一号発行をしてから、もう八年たつ。気やすく、おたがいの仕事を知らせあい、批判しあう場をつくろうということで編集をつづけてきたけれども、その編集方針もサビついてきたように思う。八年もたてばアカもたまる。こころで、大掃除をする時期に来ているのではないか。止めるというご意見が圧倒的なら、止めることも考えに入れて、みなさまのご意見をうかがおうということになった。アンケートの回収率は、日本部五枚、西洋部七枚、東洋部十一枚であった。その内容を集計したのが表1と表2である。

表1によれば、とくに支持の多かったのは「講演」「書いたもの一覽」および「旅」

表 1. 『人文』の各項目についてのご意見

項 目	おもしろい	このまま でよい	変えた方が よい	止めた方が よい	その他
わたしの考え	3	9	1	8	
講 演		16	2	3	
書 評	2	4	8	7	
共同研究のうごき		8	7	1	
研究ノート	1	11	3	6	
旅	6	12		3	
書いたもの一覽	1	14	1	4	1

表 2. 『人文』そのものをどうお考えでしょうか。

非常に おもしろい	おもしろい	このま までよ い	つまら ない	止めた 方がよ い
2	3	7	4	6

で、これらは、いずれも事実の報告といった性質のものであり、おたがいに、そのような事実を知っておきたいと思うのは当然といえよう。(ついでに、「その他」の一票は「役に立つ」というご意見であった)。

それについて、最も反対の強かったのは「書評」で、従来の在り方に強い不満のあることを示している。「わたしの考え」「共同研究のうごき」および「研究ノート」についても反対票が多かったが、それは、これらの項目がいちじるしくマンネリ化しているということであろう。また、表2によれば、『人文』の継続を求めると意見のほら、中止を求めるご意見よりも多かった。そこで、『人文』を継続することとして、その内容については、(一)「講演」「旅」「書いたもの一覽」は従来のままとし、(二)「わたしの考え」と「研究ノート」は一緒にして「研究余滴」のようなものとし、(三)「共同研究の動き」は共同研究班のなかで話題になった面白いトピックをお知らせいただくこととし、(四)最も反対の多かった「書評」は、批評という気負ったものよりは、むしろ、その本をめぐる気楽なウワサ話といったようなものに変えることにした。ただし、今まで、いちばん引き受け手なかった共同研究の報告書については、執筆者を所内にかざるといふ今までの方針に必ずしもこだわらないことにし、第一八号からそれを実行に移すことにした。(前頁へ)

人

文

第一八号

昭和五十三年三月三十一日

京都大学人文科学研究所発行

博文堂印刷

非売品